

6. 駅弁と考古学

駅弁容器概説

列車の旅に駅弁は欠かせない。今日、弁当は折り箱、お茶は白のポリ容器に入るのが通例となった。だが件のポリ容器は、本来熱ものには向いていない。採算重視の産物である。

御記憶の方も多いと思うが、かつて茶瓶は素焼の同型のものだった。それ以前、箱形の茶瓶は、徳利形で、その前は急須形。今回の調査で出土した急須は、各々轆轤を用いて作られている。年代は大正のおわりから昭和のはじめに比定される。

明治22年（1889）博多駅が開業、最初に丸明館が駅弁に着手したが採算が合わず中止。明治29年になって運送店④を運営していた末永寿によって営業再開となった。駅弁経営が軌道にのるのは大正に入ってからということだ。つまり列車の旅に駅弁は欠かせないというのも、お茶の容器が手工業製品では儲かるまいというのも、すべて今風の先入観に囚われた感覚に違いない。

小稿では、同一土壙（0301）出土の駅弁関係容器について考察を行なう。土壙は、吉塚駅が操車場であったことから察すると、『廃棄』目的に限定できる。しかも主体を占める土瓶は、蓋・瓶本体・猪口のセット関係が判り易い。生産と消費のプロセスに注目する考古学的分析に十分通じるものがある。

土瓶

出土遺物は、お茶入れの土瓶と猪口、うなぎどんぶり容器に大別できる。遺物の総量は、コンテナ80箱にのぼり、そのうち土瓶本体と蓋がおよそ9割を占める。

大川 清氏によると土瓶は、瓶本体に蓋受けのせし出しがあるものと、そうでない2タイプがあるとのことである。蓋受けの有るタイプを「キ」有り、無いタイプを「キ」無しと呼称されているので、小稿でもそれに従う。「キ」有りは「キ」無しに比べて、数段高度な技術と手間を要するとのことである。省力化の視点によると「キ」有りから「キ」無しへ型式変化したと考えられる。

「キ」有り本体は、6個体、蓋32個体である。またセットになる高台に削りのある猪口が2個体出土している。

「キ」無しの数量計算にあたっては、破片が70箱近くに及ぶため、コンテナのままヘルスメータにのせ重量を総計、コンテナの重さを差し引いて、1個体の平均重量値で割り出した。蓋も同様の方法で算出した。

「キ」無し本体は、4095個、蓋が1140個体である。蓋は本体の28%を占める。また高台に削りのない猪口は、658個で、本体の16%を占める。

また「キ」無し本体には、文字や記号のゴム印が認められるものがある。ゴム印の種類は14

通りで、588個体について確認できた。この割合は「キ」無し本体の14%にあたる。以下に数量順に列記する。

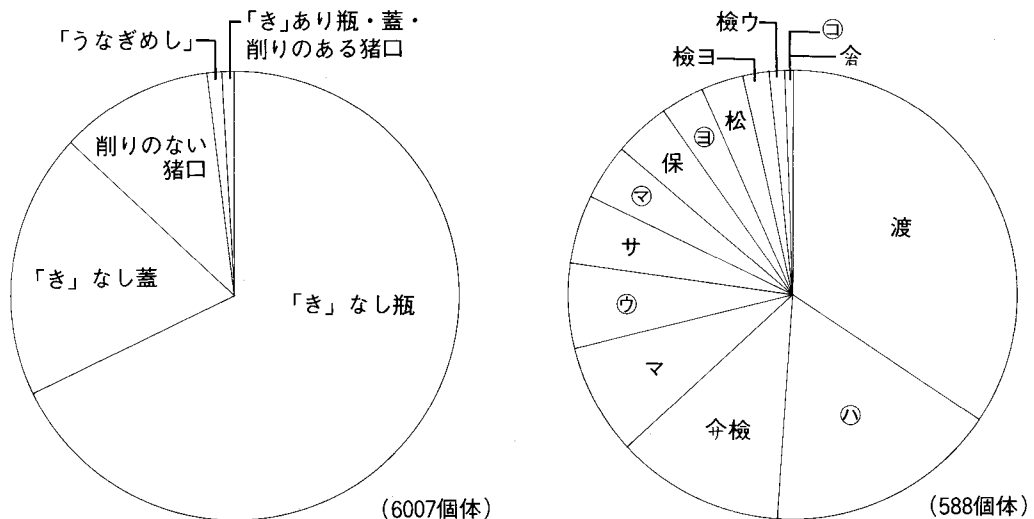
- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|
| 1. 渡——205 | 2. ㊦——102 | 3. 今検——71 | 4. マ——49 | 5. ㊵——35 |
| 6. サ——27 | 7. ㊶——24 | 8. 保——22 | 9. ㊷——17 | 10. 松——16 |
| 11. 検ヨ——9 | 12. 検㊸——7 | 13. ㊹——3 | 14. 舎——1 | |

これらのゴム印が、産地、製産者、流通業者の何れを示すのか、今のところ断定できない。ただ博多駅65年史に有限会社「芳屋」の馬渡武夫氏に関する記述が参考となりそうなので一部抄出する。「篠栗駅長として在職中に駅売りのお茶の価格が高く、しかもその容器が九州管内は特に粗悪であることを知るや、勤務の余暇をさいて百方手をつくした結果、篠栗とその周辺に良質の陶土のあることを知り、その後起った色々至難な問題をよくのりこえ、鉄道退職者とその家族によって篠栗窯業所を起して大量生産によるコストの引下げに成功したのである」。馬渡氏が窯業事業から引退したのが昭和9年2月とあるので、土壌出土遺物の時期にはほぼ相応する。「渡」は馬渡氏の一字を採ったものではないかと思う。もしそうであれば、製産者の屋号が含まれていることになる。

うなぎめし

博多駅構内営業の戦後の立売り販売品目は、弁当類（上等弁当・並弁当・すし・鯛めし・幕之内・サンドイッチ・むしすし・かしわめし）、牛乳、アイスクリーム、果物、茶わんむし、うどん、うなぎどんぶり、とある。この中、うなぎどんぶりの販売開始の時期は知りえなかったが、今回「うなぎめし」と書かれた蓋とセットになる碗が出土したので、以下に所見を記す。

「うなぎめし」は蓋35個、碗38個が確認されており、ほぼセットで廃棄されたと考えられる。



Tab. 4 土壌出土遺物の器種構成・「き」なし瓶のゴム印種別構成

蓋の内面には、つまみの輪郭が付着したものが見られるため、重ね焼きであることがわかる。

うなぎめしの書体については、PL14・15にあるとおり、幾つかのタイプが指摘できる。“うなぎめし”と稚拙な平仮名で書くもの、“う”と“し”の字がウナギの形状を真似たもの、さらに“宇奈ぎめし”と漢字を充てるタイプなどに大別できる。

碗は、すべて高台削り出しで、高台付近を除いて透明の釉がかかる。中には内外面に緑色の斑文のみられるものがある。

次に個別の解説を行ない、製作技法上の問題にふれたいと思う。

遺物解説

「キ」有り関係の資料を Fig.32図に示す。蓋と瓶は、確実なセットではなく、あくまで装着感によって配したものである。

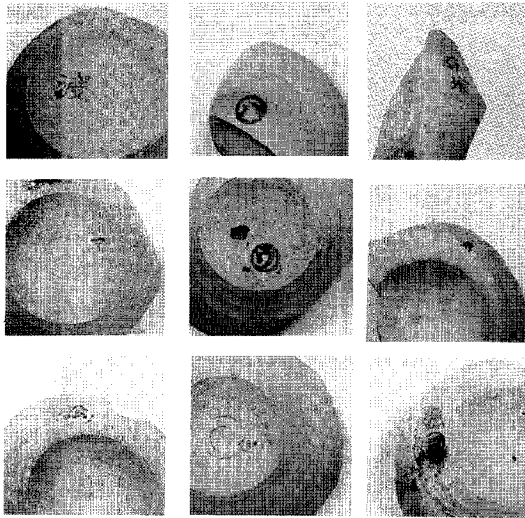


Fig. 31 「キ」無し瓶にみられるゴム印

蓋は、轆轤成形で、各れも底部に回転糸切り痕が観察できる。つまみは長短の二種があり、つまみを中心に外面に釉を施している。釉の範囲は、外面全体に施す類(1・6・9)と外縁部に施釉しない類(2・5・10)とがある。

瓶注口部の内側は、一穴の類(3・4・7・11)と本来三穴であった類(8・12)がある。また肩部の把手接合部に鉄金具が付着するものがあり、もともと針金状の把手があったと考えられる。瓶の施釉については、底部を除く外面に施釉する類(4・7・8・12)と内底部まで施釉する類(3・11)がある。

釉の色は、青味がかかった灰色という表現があてはまる。瓶8は、暗緑色の釉で、「キ」の整形も他の瓶と異なる。内底部には布目跡があり、外底部の立ち上がり付近に、重ね焼きの際に付着した釉が観察できる。従って瓶8のタイプは、蓋を外した状態での重ね焼き、外縁部に施釉しない蓋は、蓋をした状態での焼成も可能であろう。

手間を省く——省力化という点で、「キ」有り瓶から「キ」無し瓶への型式変化を理解するなら、セットとなる猪口は、高台に削りのあるタイプが想定できよう。

以上「キ」有り関連の所見を述べたが、「キ」有りの多くが完形品かほぼ完形に近い遺存状況である点に留意すべきであろう。

次に「キ」無し関連の資料について説明を行なう (Fig.33・34図15～34)。「キ」無し瓶は、4095個体が算定されているにも拘らず、完形あるいは完形に近い瓶は、ここに図化した7点の

みである。「キ」無し瓶の主要器種は、肌色の胎土に透明釉を施したタイプ (17・18・21・22) で、25・28は、灰色の胎土に淡い緑灰色の釉を施している。また26は、赤褐色の胎土に褐釉を付すタイプであり、24の蓋とのセットが予想される。24と同型式の蓋は他に一点認められる。17・18の瓶の肩部には錆化した金具が付着していることから針金状の把手を有していたと考えられる。また施釉の範囲は、17・18・21・22の瓶では、蓋受部を除く内面と外面の肩部から胴部中位にかけてである。25・26・28は外面のみ施釉している。また注口部は、すべて一穴である。

蓋は何れも底部に回転糸切りの痕がある。施釉は、24が外面から縁にかけて、20が無釉であるのを除くと、他は、瓶の蓋受けに接さない範囲で、内面に釉を施している。

「キ」無し瓶は、蓋を付けた状態での重ね焼きも可能である。

セットとなる猪口は、29～34までの6点を図化したのが、高台部を削り出さないという共通点を除くと、釉調や器形にかなりバリエーションが認められる。

さいごに「うなぎめし」容器について、Fig.34・35の35～54までの蓋と碗の個別のセット関係は明らかではない。

とくに蓋は「うなぎめし」の書体による分類も可能と思われる。蓋は外面と井の湯気のつく部分に施釉されている。44・47の蓋内面を除いて、重ね焼きに際して付着したつまみの痕が観察できる。また43の蓋は、縁部に棒状の工具を刺して穿孔している。

小 結

これまで駅弁関係の「土瓶」と「うなぎめし」について記してきたが、製作と消費にかかる問題を整理しておきたい。

まずこれらが使い捨て容器だったかである。「キ」有り土瓶のなかには、注口付け根部に3つの穴を穿つタイプ2例が含まれている。これは、土瓶本体にお茶の葉を入れ、さらにお湯を注いだと推定される。その他の「キ」有り及び「キ」無し瓶の注口接合部の穴は、すべて一穴であり、大きな湯わかしに入ったお茶の注ぎ分け容器である。

これらは数度の使用に耐えるものだが、駅での立売りという性格上、列車内で消費されたものの回収は面倒であろう。これは「うなぎめし」の井についても同様である。

つぎに数量からみた廃棄の性格について。

「キ」有りは、6個体で蓋が32個体、この蓋は、「キ」無しの瓶には使えないので、数字のうえではセットは成立しない。「キ」無しについても、瓶本体に対し、蓋は28%、猪口は16%であり、セット関係は「キ」無しも成立しないのである。

それでは、廃棄の契機は何であろう。土瓶は、欠損したものを主体としているようであるこ

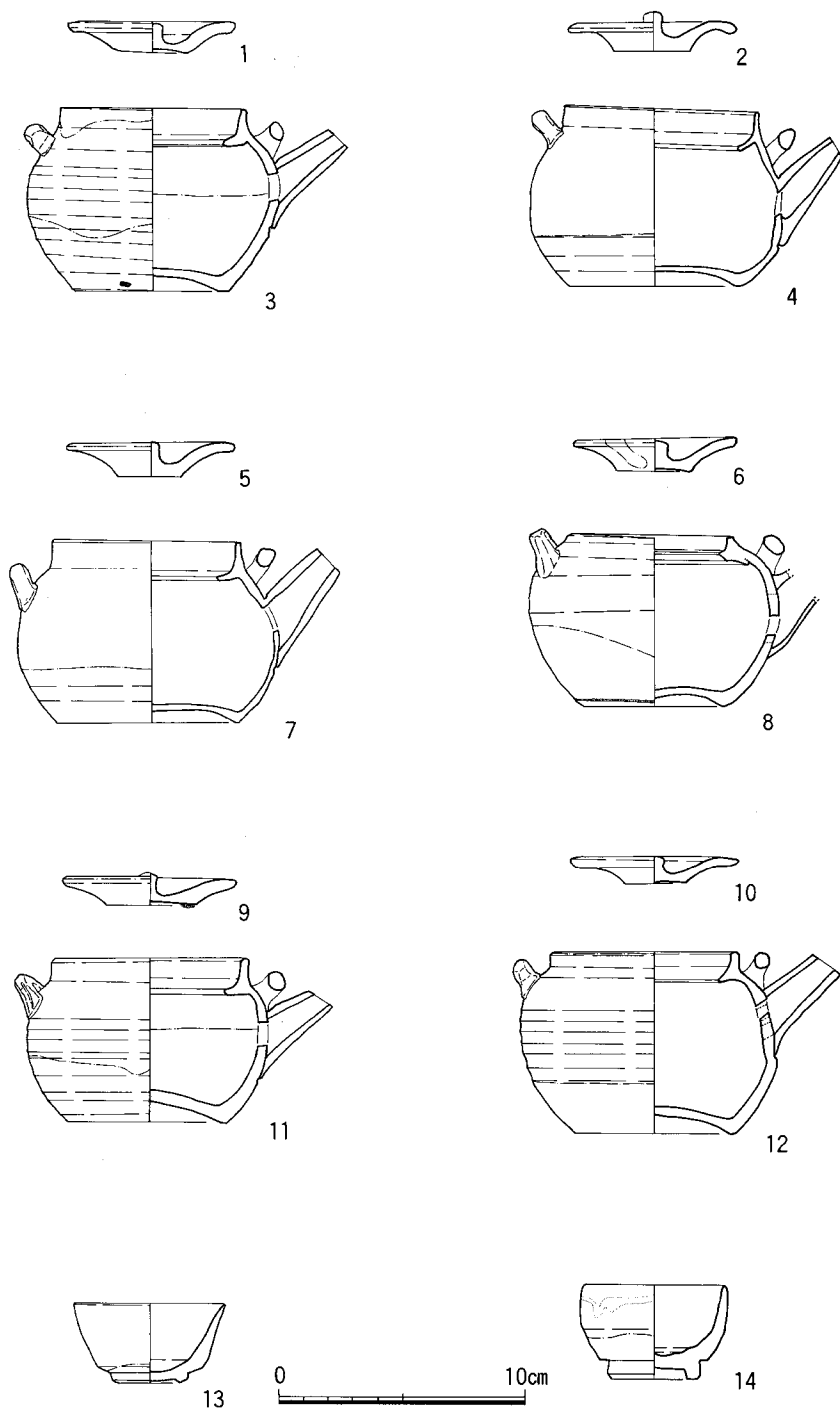


Fig. 32 駅弁関係容器 1 (1/3)

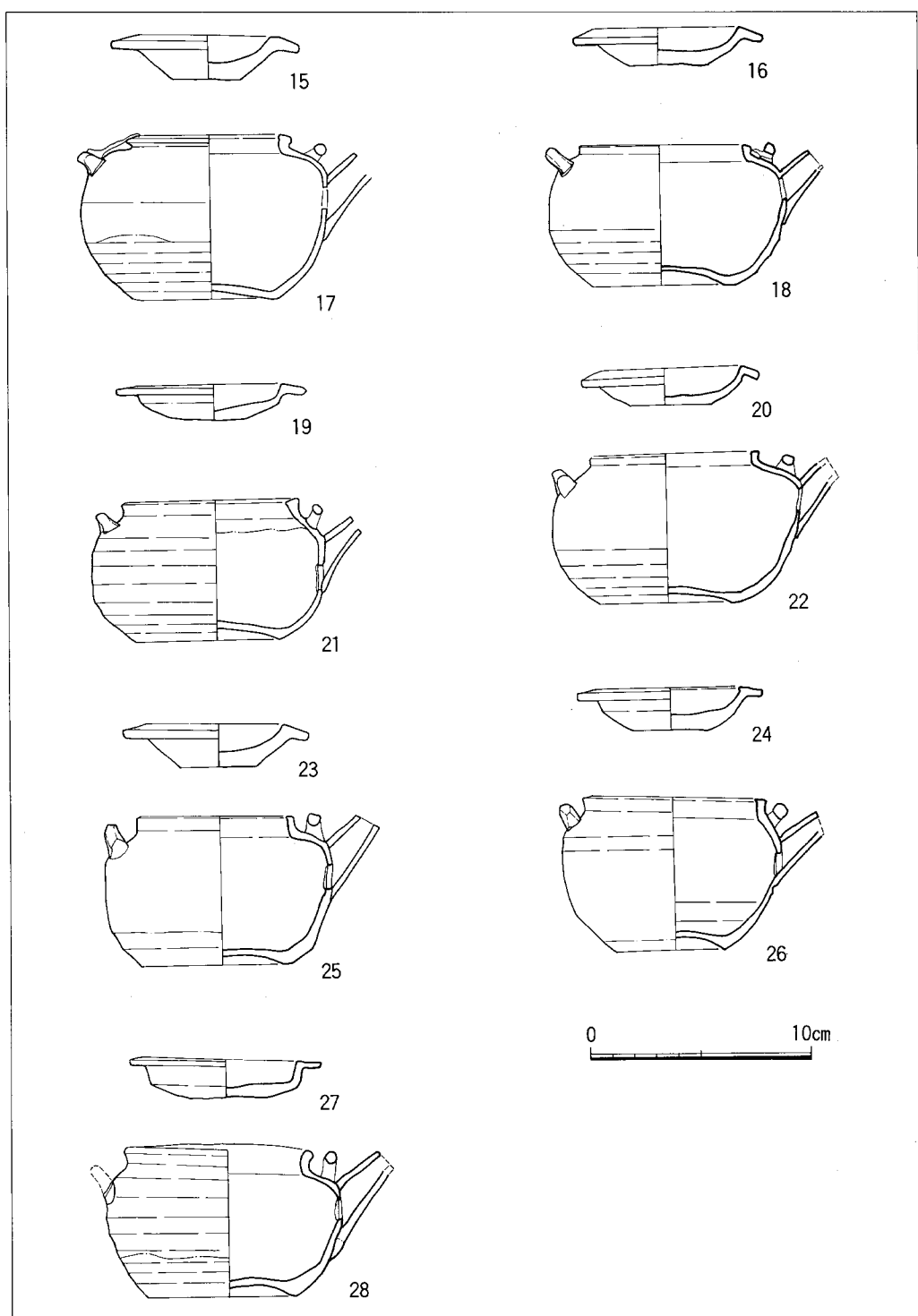


Fig. 33 駅弁関係容器 2 (1/3)

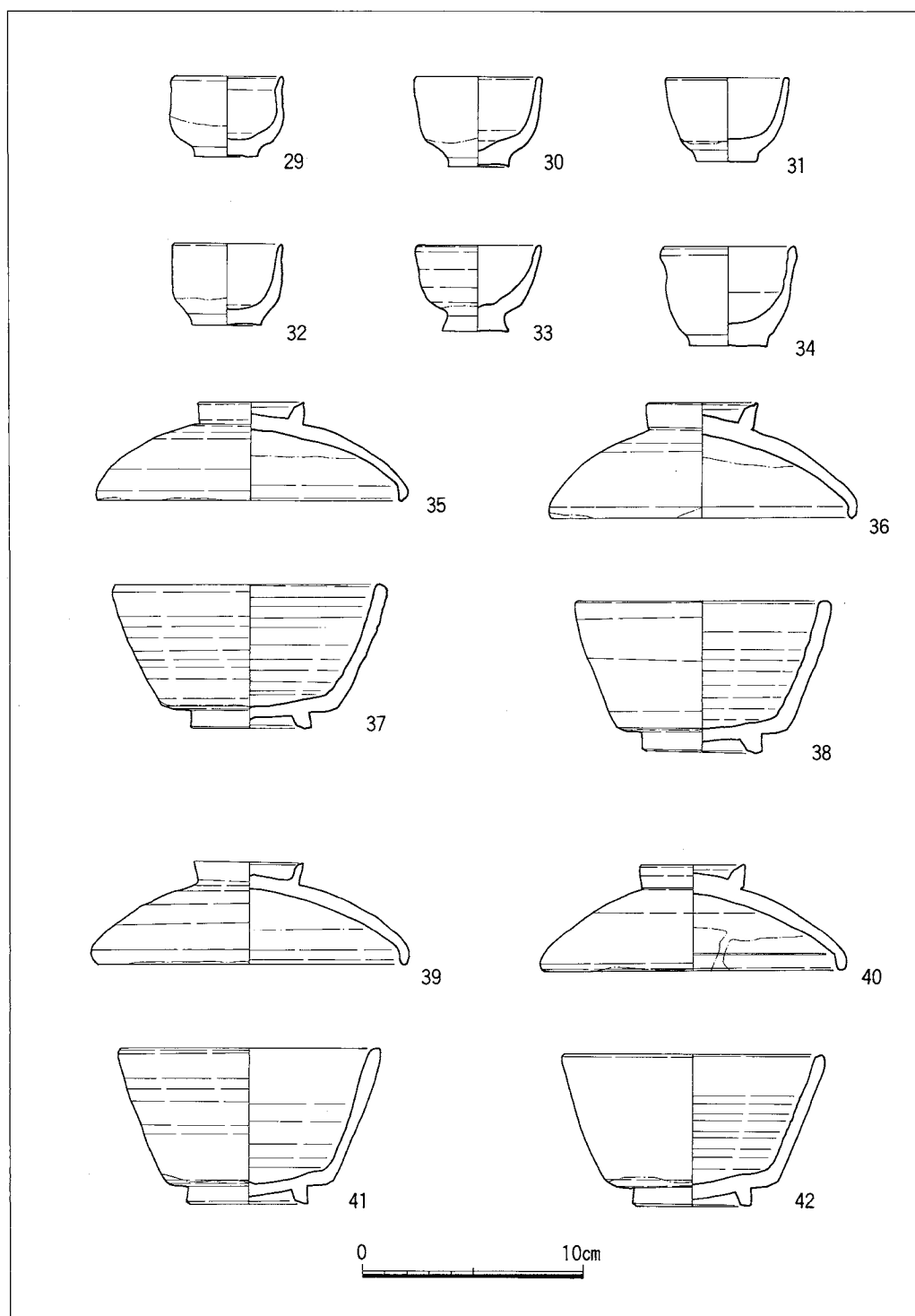


Fig. 34 駅弁関係容器 3 (1/3)

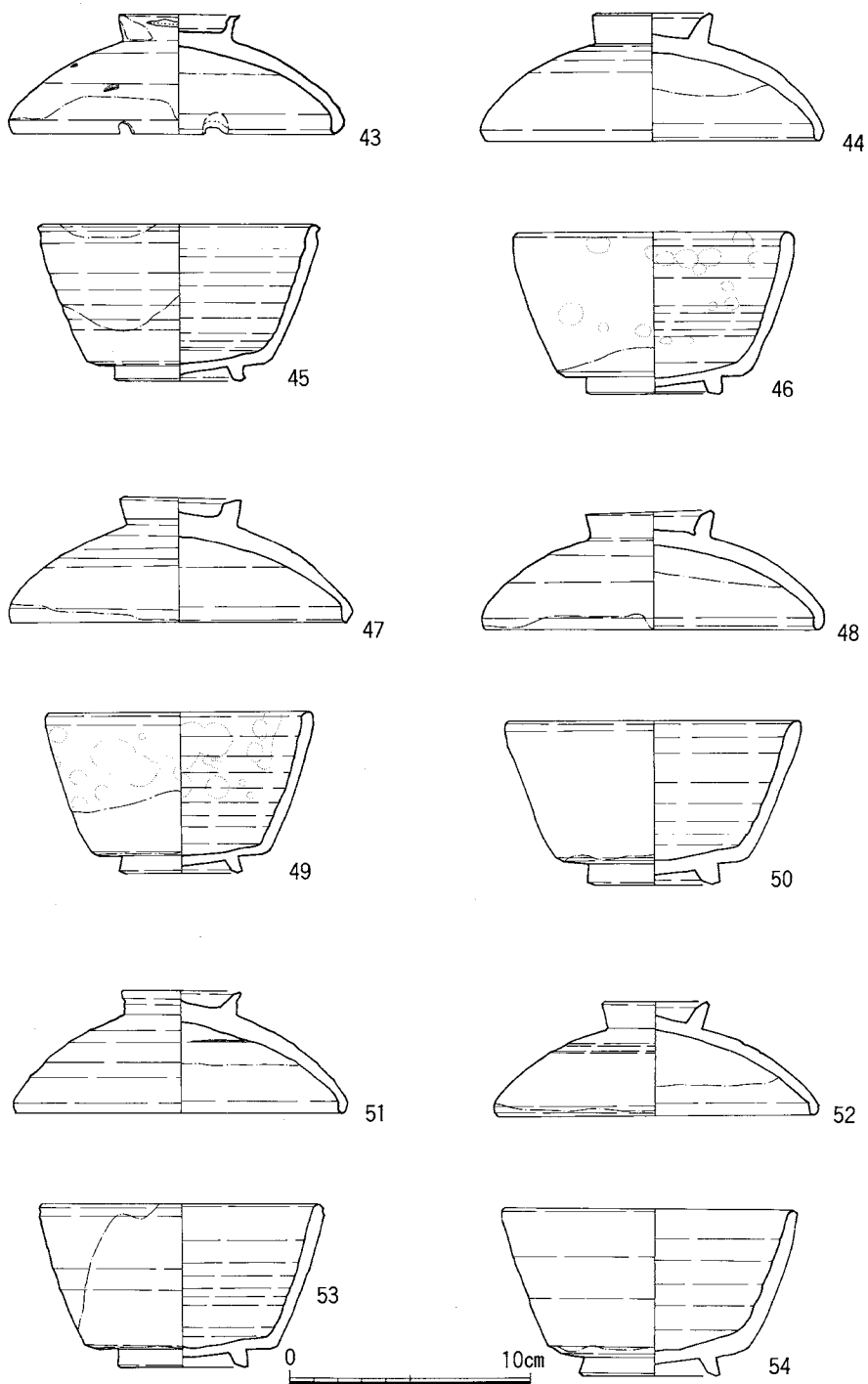


Fig. 35 駅弁関係容器 4 (1/3)

とから、パーセントは、瓶を100とした場合の蓋と猪口の破損、代替の比率を象徴しているのではない。つまり薄づくりの瓶に比べ、蓋や猪口は破損の確立は低いと考えられるからだ。しかも猪口は、瓶の形状が、徳利形あるいは箱形と変わってもセットになりうる。

さらに完形に近い瓶は、胎土や釉調が異質である点に注目すべきである。つまり瓶の99%以上は、肌色の胎土に透明釉を施した製品であり、その多くは破片である。この破片となったタイプが、鹿児島本線一定区間内の規格品とすると、土壌に投棄された瓶は、別の路線からの混入品（完形に近いもの）と使用に耐えなくなった規格品と推定される。

以上から、鹿児島本線の区間内で、駅間の連携による容器回収が行なわれていたとの結論に致った。半世紀余り前の状況を器種構成をもとに考察した次第である。

また駅弁関連遺物については、この他に见えない容器——折り箱の存在を含めた生産・流通・回収を把握すべきであろう。

今回分析した資料は、大正末から昭和のはじめに比定されるという。型式細分や窯趾については言及できなかったが、様々な観点から再分析が可能と考えている。以上の消費にかかるストーリーは、文献資料との付き合わせは行なっておらず、ひろく御教示、御叱正を乞うものである。文末になったが、資料収集や出土遺物について御教示いただいた諸氏、諸先生方に御礼申上げたい。

石山 勲・井上裕弘・大川 清・首藤卓茂・日高正幸（五十音順・敬称略）

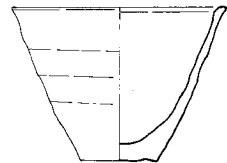


Fig. 36 「チャイ」の容器 (1/3)

参考引用文献

- 井上裕弘・日高正幸「吉塚本町遺跡」『福岡県文化財調査報告書第97集』、福岡県教育委員会、1992年。
博多駅「博多駅六十五年史」1955年。
兵庫県教育委員会「神戸ハーバーランド遺跡」『兵庫県文化財調査報告書第52冊』1987年。

追 記

駅売りの容器について、同僚の池田祐司氏が1988年1月、旅行先のインドから持ち帰ったチャイのカップがあるので紹介する。チャイとは砂糖入りのミルクティのことで、デリー～カルカタかボンベイ～プーナ間の列車内で1ルピーか2ルピー（10円程度）であったという。チャイ売りの男性が、チャイの入った薬罐とカップの詰まったバケツを抱えて「チャイー、チャイ、チャイ、チャイ」と言いながら売り歩くという。容器は使い棄てで、駅のプラットフォームや線路際に投げ棄てられていたということだ。素焼きで、底部に回転糸切り痕がある。駅売りの消費の一例である。